ロール　～ＬｕｘＥｘＭａｃｈｉｎａ～機械仕掛けの光機１

ろっきゅん

序章

「メディック！　メディ――――ック!!!　クソ、このままじゃ、こいつ死んじまうぞ!?」

とある兵士は、名もなき兵士の死に際のさいに、敵スナイパーからの狙撃も恐れず救援を、治療班を叫んで求める。

「……やめろ……お前が狙われる……」

「ふざけんな、そんな事言ってる場合か、マジで死ぬぞ！」

悲痛にして悲憤、やり場のない募る思いで叫ぶ兵士に、名もなき兵士は力弱くも微笑を浮かべ――

「死ぬ、か……いい、良いんだ……。色々わるかったよ」

「――なにが？　何を言ってるんだ！」

「お前に、お前に……、いつも……、お前に……、つっかかちまって、悪かっ――クソ、いてぇ……いてぇなぁ。あの野郎、どんぴしゃで当てやが――くっ、死ぬ――」

「いいから、だまってろギルシュ！」

名もなき兵士に、名があった。

彼はギルシュというらしい。

「お前無茶しすぎなんだよ！　しかも何発喰らってんだ！　もうあなたのＨＰは０よ！――と同じじゃねぇか、いいから黙ってろ！」

「く、っそ――いてぇ、ロンダルキア……ロンダルキア・アイゼンバーグ、俺は、俺は……まだ……死にたく、ねぇよ。故、郷に、故郷に、この戦争、終わったら……故郷に結婚しようっ

て約束した女が、メルルクが……メル……ル……ク……が……メル……ッ……」

そこで、

彼の体の四肢のこわばりが消え、

目の輝きが失われているのに気が付いた……とる兵士ことロンダルキア・アイゼンバーグが……

「――メディ――――――――ック！」

敵に気づかれるのも無視して絶叫する――。

「何してんだ、メディ――――ック!!　まだか！　またか？　また俺の前で誰かが死ぬのか！　死ぬな、死ぬなギイイイイイイイイッシュ！　俺を一人戦場に残さないでくれえええええええええええええええええええええええ!!!ギイイイイイイイイッシュ!!!!!!!」

降り注ぐ雨が強風に煽られ、断続的に、ごちゃまぜのゴミダメかスクラップ置き場かを連想させる幾つモノダンボール箱。そこに放られた手足を、涙した眼で横目に見つめ、今も彼はこのように物言わぬ肉片ぶちまけて死んでいる。いや、きっと心はこんな感じでしんじゃってるぅ。

そう思うロンダルキア・アイゼンバーグが、自分の錆びれた部屋のガラス窓に、黒く澱んだ車軸を降らすような雨が窓を叩いている光景に、一時現実を忘れる。

目の前で死んだ戦友の事を忘れる。

窓から覗く外界では、空間制御区画を、律儀に守って飛行する航行車（フライヤー）がみえる。あれも敵だと仮定するならば、今、目の前の戦場では、叫んだがゆえに位置を掌握され、一体どれだけの輩がロンダルキアを葬ろうと、周囲を索敵してるのか――

「……わかるわけ、ねぇだろ……。なぁギルシュよぉ……」

もはや無謀ともいえる勝利条件は、昼でもなお暗い外界の雷雲の如き、お先真っ暗だ。

フライヤー（自動走行浮遊ユニット・マキナ）のライトがビル群を照らすと、一瞬部屋中を

照らし、部屋の隅、窓越しから覗く彼の全身を一瞬だけ強張らせ、フライヤーの前方から放射状に延びるライトの輝きが、何事もなかったように窓から建造物へ、そしてビル群へと流れていく。

その輝きは早朝の通勤ラッシュに溢れる人々を、地上を監視でもするように降り注いでいて。

一時の安堵ともいえる銃撃戦の隙間に据えなかった、重苦しい部屋の大気を、空気を、ようやく大きく肺腑に取り込み、そして輝きが再び室内の一つに飛び込みと、彼は布団から毛布を引っ張り、あわてて体を隠す――

そして再び【作業】に没頭する。
人殺しという、戦時下においてはおK。
通常平和世界ではギルティ。

そんな上層部が決めただけで人殺しも可能な世界に変える輩に唾でも吐きたくなる思いに囚われながらも――

それでも一人の少年は、敵視たる眼差しの持ち主が、眼前に現れた事によって、まさに死んだも同然だった。

「くっ、もはやこれまで――俺以外、全滅かよ」

既に懐にて息を引き取ったギルシュをその場に寝かせると、再度リボルバーの弾薬を装填する。

彼は、思い切り、たぶんこの世で最後になるだろう呼吸を、
大きく大きく肺腑に取り込んだ。

「はぁ――負け戦か……、これも……記録されちまうんだな……」

彼は面貌に悲しみを宿らせながら――

飛び交う銃撃音。

的確に狙ってくる、自分らの勝利を確信した奴らの咆哮。

すでに光にも見えるその弾丸。

まるで狼の群れが山間からせりあがる雷雲のように駆けめぐる姿――そんなものを想させて津波のように眼前にせりあがる。

それは敵の軍属の群れと、発射されるガトリングの津波だ。

ゆえにロンダルキア・アイゼンバーグも覚悟――

「回線ひっこぬいちまお」

ぷち。

そう言って彼は――

今時、には時代遅れの光回線を引っこ抜いて、

【ヴぁーチャル・オンライン・ＦＰＳ】

のゲーム機、

電源を――止めた。

つまり負けカウントされんの嫌だから、回線ぷっつんで逃げた。

……最低だ。

まるで好きだった女の子が病室で目を覚まさないので、偶然見てしまったぱいおつで、監視モニターついて室内録画されてんだろう事も無視してオナってしまい、賢者タイムで手に着いた１～10億はいるだろう～白いおたまじゃくし～もどきが、手についてるのを見て――の、主人公の発言と、同義だろう。

暗がりの部屋の誰もいない空間内にて、部屋乾燥にもかけていない湿気った布団にＦＰＳガンコンとバーチャルヘッドディスプレイを取り外して放り投げて、普段着用の銀縁大き目眼鏡

を顔に装着。

彼は大あくび。

手に持ってたサブウェポンコントローラも、横になったまま足で蹴りとばし、今自分が使ってる枕元にあるｎｏ　ｓｉｇｎａｌ　と、書かれたモニターも適当に手で振り払う仕草。

それだけで空間に投影されてたディスプレイ。

ヘッドディスプレイからみたら完全３Ｄになるそれを適当に消滅させ。

逆にプラスチックケースにいれられた、ゴミ臭いパーツを詰めた箱の一つを引き寄せた。

「さぁて、作業再開といきますか……」

今日の【ゲーム】は上手くいかなかった。

だけどこんな日は、変わりに別のので良い事がある。

それが『俺の持論ね』とは、彼、殺人シュミレーションゲームで回線引き抜いて、メモリーに敗戦レコードが入らないようにガンバッタ稀阿の言葉だ。

「なんだかなぁ……てかなにこれ。くそ、やっぱりここも壊されてるのか。脳幹になるスピリッツチップ、は、だめだこれ、割れてるし。かっぱってくるときは、しっかりした物に観得たのに。暗いし、見落としたか。サブマシーンから持ってきたチップのほうは……、ええ、これも合わない。こっち……は、やっぱダメだ、ＣＰＵにグリセぬってねぇ、最初から塗ってねぇのか？　だめだこんなの使ったら暴走して出火するぞ！　くそ、くそ、くそ、あの時、連中と、あの白野郎を撃ち殺しときゃこんな事にならなかったのに……いつかぶちのめして、修理代絶対親に払わせてやる！」

そこで少年は壊れたチップを部屋の側面に投げつけた。

そこにはダーツの的があって、ど真ん中に直撃すると、真下のゴミ箱に収納されるように、吸い込まれた。

「どうする、どうする、全部揃えたとおもってたのに、……なんで、こんなに腐ってる」そこで外を見て、二重窓の向こうに見えるビルの明かりと、明かりが反射させて存在を見せる、異様に低い、闇をのみ込みそうな暗闇が天蓋のように天空に横たわっている。

「なるほど、あの雨か、雨にあたりすぎて、拾ってきたサブのマシーンロイドが外皮装甲の破れから浸水。で、機材のほとんどがダウン、か。前のオーナーもそりゃ捨てたくなるわな。こんなに彼女のマタにち〇こ、つっこんでたくせに、ロボには愛はないってか」

と、少年は自虐的に笑う。

「と、なると、やっぱもう一度外にでないと……ダメか……行きたくねぇ……」

徹夜明け。

まさにそう思わせるほどの肩まで伸び切った長い髪、そして無精ひげ。

その男は少年だ。

けど、年齢に似つかわしくない顔色で、徹夜の連続なのだろう。目の下に浮かぶクマは当分消えそうにない。

汗で滑りを帯びた烏色の黒髪を乱雑に掻きながら、苛立ちと、心底困ったといわんばかりに気だるげな眼差しを手元へ向けた。

寝着変わりにした白のパーカーにジーンズは油膜で汚れ、手元ではやらなければ作業を理解してるかのように、意思とは無関係に工具音が響いていた。

彼の周りでは天井を走る剥き出しのパイプ。この建物全部に張り巡らされてるのだろうパイプにロープを結び、そこから人体模型のような金属の手足がぶら下がる。

床では各種プラグパーツと、稀少な金属片が、輝度（ルミナ）と呼ばれるどんな金属鉱物さえも液状化させるシートの上で融解を起こして沈んでいる。

これに手を加えれば、上質な物なら内部パーツのチップとかへ加工もできるが、そんな機材は彼がもっているわけもない。

6畳一間。

おまけで突いてた納戸扱いの部屋は、乱雑に積まれた私服やマシーンロボのスペアから各種機材。研究機器などの放置によって完全倉庫代わり。

そんな散乱とした部屋の中で少年は奥歯を噛みしめた。

「――駄目だ!?　せっかくみつけたのに全部ジャンクだ！　いや、ジャンクだから、全部あのゴミ地帯に葬られてたんだが……つまりジャンク中のジャンクだ。もってくんじゃなかった！　輝度（ルミナ）で融解して、強羅（ゴーラ）があれば収縮加工出来るのに、粗悪品だから融解すら始まらん、まぁなんかこれら、まだ年式新しいし、うちの機器だと加工器具集めしなきゃいけないんだけど、いずれにしろふざけんなよ！　って、ここまでわかってんのに解決方法がわからん!!!」

その少年、見た目十代半ば――

一応、名はある。

親がつけた名ではなく、育ての孤児院で、そこのシスターが、ロッカーに捨てられてた赤子を見つけて保護。

指紋や網膜の認証が全て登録簿に記載がない事から、そこらの女学生が野郎とファックして、ボーン！　でもその関係で監視カメラにしっかりと捉えられ、まだ赤子の母親は中学生。警察の、かなり脅迫めいた脅しに女子中学生がすっとぼけられる訳もなく、相手の男はすぐに判明。男は男子テニスサークル所属の有名大学生にして、ある高名な血筋の御曹司。ゆえに捜査は中断。終了。そしてデータ上から全て消され、女子中学生の母親からも進学の邪魔だから死んでくれ、と、ロッカーにいれられた経緯を吐露し、酷い衰弱の赤子を見せた途端、包丁もって、赤子の首を刎ねようと迫り、その刹那の中、煌めく刃を掴んだのは、同伴した赤子を警察と連れてきたシスターだった。

赤子育児放棄。

それが母親の両親の決断。

本来なら許されないが、父親に当たる高名な、上級国民である息子の父親の一言で孤児院に捨てるよう指令がだされ、警察は異の一番で登録。

シスターも、この狂った上級階級とヤリチンに良いようにもてあそばれて、ヤリマンビッチになった中学生女子やその家族に任せておけないと、孤児院へ。

そしてそのままシスターと赤子は保護プログラムに乗っ取り、教会から教会へ、幾度も移動し、誰もが所在が分からなくなるまで移動。

そしてシスターの息子として市に報告、人間登録完了。

母親となったシスターが働く教会の孤児院にいれ、彼女は赤子に名前を与えた。

その名は――守夜稀阿（かみよきあ）。

そして時は流れ、ある才をもつ事が分かった稀阿は高校進学と同時に孤児院を出て母親に別れを告げ、学生寮に登録されてるアパート暮らしへと所在を移した。

そして、いろいろあって、ぶっ壊されたメイドロボを直しているといった具合だ。

さらに付け加えると、それも諦めたらしい。

手に持ったレンジを放ると倒れ込むように背中を壁へ預けた。

すると空間から声がする。

『マスター・稀阿。学園の活動部からメールが届いてます。七件です。さらに委員長様からのメールが三十五件です。題名に【緊急！】【早く見ろ！】【この馬鹿！】等の最重要扱いメールとなって届いています。お時間がよろしければ展開しますが？』

「いや、いい、絶対見たくない。何かの間違いでみることになったら、それでも今度にするよ」

響いた声へ呟くように稀阿が告げると、室内は再び静寂に包まれる。

そうなれば外部の喧騒が耳朶を揺らす。

主に響いたのは、黄色く弾む女生徒の声だ。

――もう、みんな登校時間か。

力無く見つめる室内には、幾つ物ダンボールが転がっている。必要最低限の出費で抑えた各部のパーツ連結器か、輝度や強羅が入ってる。

中には女性の胸部パーツや代替パーツ。無論ペタ胸ボディに憧れて。

「それに、でかいと目立つしな……」

入りきらない床には脚部が転がり、その下には丸めた賞状と転がるトロフィー、土埃に塗れた学生鞄と学生服も粗雑に放られていた。

足の踏み場もない床に溜息を衝いて、稀阿はそれらから視線を外すと崩れるように身を横たえていく。

ただ、――ピコンと、軽快な作動音。

稀阿の意識を受け取った空間画面（エリアモニター）の幾つかが起動、ＯＳエレノアと、ＯＳ購入時、強制的に勝手に入っている無数のアプリ。

たぶんＯＳの企業がその他のアプリ会社と結託して、広告収入状態で――

というやつだ。

その一つが勝手に起動。

『こちら、皆さまの生活を守るムラクモ省広報部です。昨今マシーンロボ、通称名ロイドを悪用した暴力行為、凶悪犯罪が多発しています。何か異変が起こった際は、すぐ都市警備ツヴァイ・アールへ一報を。管理ロイドを急行、暴徒鎮圧を約束します。皆様、決して仕返しや独自解決をしないで下さい。カテドラル・ムラクモの安全を守るのは――』

――まさに誤作動か。

そう思いながら展開した公共放送を旧世代のゴミ捨て場、通称ジャンクの山シャングリラから拾ってきたＰＣの画面を消し、隣の映像も消そうとしてその光景に稀阿は舌打ちした。

映ったのは稀阿の住む寮の外界の光景だった。

防犯用のアパートの監視カメラ。

アパート正面の誘導路と呼ばれる『路』は、光の誘導サインが流れて幾多の人々を歩かせずに、立っているだけで目的地に運んでくれる便利な機械仕掛けの道路だ。

目的地を乗路センサーに言えば、その場から通過、目的地まで安全に走る。

そして、そのためにも個人情報の提示が義務づけにされ、メイドなり執事なりのロイドが高速電動粒子で、路に乗り込むときに、勝手に提出してくれる。

また逆にロイド所有者になれない、ゴミ場でゴミさらいをする下級第三位人種が、餌になるものをさがしている。

そういう人と上級国民や中級階層国民などはロイドを持参。

そうしなければこの路にものれないのだ。

そして映像では丁度、稀阿が在籍する南地区第六学園の生徒が移されていた。

「消していいぞ、エレノア」

しかめっ面で声高に言う稀阿の言葉通りモニターが消えていく。

強めの言葉に幾つかが消える。しかし、展開され続ける物もあった。

誘導路が学生達を個々に移動させる光景

上級国民、もしくは中級階層の生徒たちだ。

さらに彼らの頭上には個別に幾何学模様を作る光学シールドが見え隠れして、雨を遮り、放射能を防ぎ、放射能無効化の傘が展開。

薄黄色に生徒の頭上に出現。

皆をハンドフリーで談笑させながら学園まで運んでいく。

これらが全て一等市民や二等市民、つなり上級国民と中流階層が得た隣を歩く者――サポートロイド、もしくはマシン・ロボ、そしてヒューマノイド・ロイド。この一般語でロイドと言われる、大昔のアンドロイドに近い存在は、人工知能がこの大地――通称コロニーと呼ばれてる中では、あらゆる事に対応してくれる。

人はそれを、何故かディスアの恩恵という。

「……けど、今の俺は三等市民と同様だ」

そう独り言ちる稀阿はモニターに映った一人の女子高、その隣にいる能面のような面貌を持つ人型を見留めた。

これこそ上級中級の人一人に宛がわれたディスアだが。

「硬化セラミックタイプか。そっちは……ああ、服で隠してるが逆関節タイプだな、ご主人様はとんだマニアック野郎ときたもんだ。お、そっちはコルトップ社製の二世代前のレアじゃん……武装スロットが多くてえらい高価なんだよな。デメリットは電流の蓄積バッテリーが少なく、おかげでラジエーターがすぐオーバーヒートだ。てか、学校に何を搭載していく気だお前は――」

道行く学生の随伴をするサポートロイドを鑑賞しながら品定め。

けど、その一体。戦闘用ディスアを見て、稀阿の唇が噛みしめられる。

「戦闘用は……駄目だ。他人ばかりか自分を傷つける。俺の伴侶となるディスアは非武装にしてやるんだ……搭載するにしても……登校時の一回だけにしないと」

自傷気味に漏らす言葉。

その意味は誰も知らない。

言葉の端々から伺える、確固たる意志の意味も知らない。

項垂れていく自分に気づいていながら、それでも力篭めて眼差しを見開くと、瞳はモニターに流れ、そこで胸の大きな女性が学生集団の中にいるのを発見する。

「凄いな。顔は……まぁ、中の上か」

少しは気分転換か。

そんな気持ちで口角を上げて、モニタの前へ手を翳す。すると空間カメラが移動する。地表すれすれからのローアングルへ固定され、そのまま手操作でカメラを上げていく。そうなれば映るのは女子学生の太腿だ。舐めるようにさらに上昇。そのままスカートに差し掛かり、稀阿が身を乗り出し、ズームが入るところで。

ピンポン――

妙に間の抜けた呼び鈴が室内に響いた。
それに連動し、稀阿はため息をつく。
さらに頬へ皺が寄る。
「またか……もうほっといてくれよ委員長」
幾度かチャイムは鳴り続け、やがて静寂。――と、見せかけて。
ドガン！　扉が蹴られる。
一回、二回、五回、十回。
――これでは隣人迷惑。大家にも悪い。それ以前に扉が壊れる！
「分かった、分かったよ。俺の降参だ！　委員長！　てか止めろマジで！」
慌てて扉まで駆け寄り、一度深呼吸。
そして一気に扉を開くと前蹴りが鳩尾にめり込んだ。
「――ぐぇ!?」
「あ、ごめん。いきなり開けるから」
まったく謝罪の色を帯びない声がする。
悶絶くの字で前屈み。
それでも稀阿が面貌を上げれば青色の長い髪が風に靡いて揺れていた。
大きな胸元に垂らした髪は見事にウェーブし、色白の肌に目鼻立ちの整った彼女は紛う事無き美少女だ。
さらに双眸も見事な碧眼で、紺を主体に胸元に赤リボンを付ける学園ブレーザを纏う彼女が、今時ありえない巨大丸眼鏡のブリッジを指で跳ね、さらに頭後ろで巨大な赤いリボンを揺らしている。黙って立ってれば大人しい委員長系のお嬢様なのだが……。

「おはようロイドマニア。ほら、出会った時は挨拶でしょ？」
「く、お、おはよう委員長……って、出会うじゃなくてお前が来たんだろうが!?　それとロイドマニアはやめろ！」

「いや」
「こいつ……」

「それより登校拒否なんてやめて学校行くよ。ロイド部の人たちも部長が来ないって嘆いてるんだから。あんたが広めた個人メカでの対決大会を作って、優勝した。そして今ではムラクモ中の学生が優勝目指して切磋琢磨されているのは、全部君の作ったロボが行政の教育機関に正式認可。あんたのロボットはムラクモ中の学生や各企業の注目の的なの！　だからロイド部ができて、皆があつまったんだから、その部長が引き籠って、冗談でしょ。ひとりねちねち、壊されたロイドの修復してんでしょ」

「――、――、……まぁ、な」

「だったら貴方は出て、そして戦わないと。そうしなければ、あのいけ好かない転校生が奴隷を集めて、あいつの問題は教師たちも、何かおどされてんのか、誰も注意すらしない。まさにやりたい放題の転校生と部下どものせいで、どんどん酷くなってる」

そう言って腕に抱き付いてきた。
柔らかな膨らみが腕に当たり、稀阿の面貌が朱へと変わる。

「で、でも、お、俺は行く気が無い……てか、もう知らん。そもそも何でそんなにムキになって俺をここから連れ出すんだよ。休日もお前かかさず来るよな？」

――もしかして俺に気があるのか？
そんな事を考えれば、否が応にも唇が震える。

そんな稀阿に委員長は鼻を鳴らした。

「その件か。それは簡単。あんたに行く気がなくても行かせる。それって登校拒否児童を復学させたっていう実績。学校側に知らしめれば私の名声もあがるし進学にも優位に進む。そのため今後の布石にして来年は生徒会長にも立候補するつもり」

小さな鼻頭をひくひくさせて、嬉しそうに微笑む委員長。
そんな彼女を少々眺め、兎かこいつ……。

だから稀阿は腕を振りほどくと、
勢いよく扉を閉めた。

阿も、吽もない。
何の前触れもなく部屋に引っ込んで扉に鍵をかけた。

『あ、ちょ、こら、なんで閉めるの！　開けなさいよ！』

「うるせ、自分の内申点稼ぎの為に来てるのかよ！　ちょっと何かを期待しちゃったじゃないか！　男の子の純情返せ馬鹿やろう！　とにかく今日も学校に行かない、一人で行け！」

『何よ期待って！　それより私の内申点の為に生贄になりなさい守夜稀阿（かみよきあ）！』

「てめぇ、ざけんな！　そういう口調はＪＳまで！　メスガキだから許される発言だ！　だが、もうお胸の大きなお前は違う！　すでにペドロリコンの世界では、婆だ！　しかも身長あってボイン？　赤リボンの黒い長髪に染色して、どこのガツ盛りのフェチ好きキャラだ！　５～６年前に戻ってまっとうな価値観を手にいれてからやり直してこい！」

その後、幾度も扉が叩かれるが、無視し続けてたら、一際高い蹴り音が鳴って委員長が去っていく。

溜息をつくと、未だに消えないモニターがいくつかあるのに気がついた。

「もういいから……早く消えろ」

その言葉に登校中の学生たちの姿が虚空から消える。

元の暗い部屋と、けぶる灰色の靄が部屋の中を染め上げていく。再び聞こえるのは降りやまない雨と強い風の音。稀阿は部屋の隅に放られたパーツの山を見つめていく。

見る影もなく酷い破損を受けたボディパーツや腕部類。原型の無くなった脚部パーツ。放られた頭部に、ジェネレーターを見つめ。

「ちっ……」

舌打ち。今度は自分の意思でモニターを展開。舗装路に学生がもういない事を確認すると、テーブルに置かれたカロリーチップのグラスに手を伸ばして数個ほど口に放り込む。

「三等扱いされそうだが……この時間逃せないし、仕方ないか」

白のリュックを背負うと転がったままのレインコートを頭から被り、輝度シート上に浸していた液化した金属を瓶詰にしテーブルへ並べる。

「固定化(フルフォーム)用の強羅シートは後で入れてやるよ」

壊れたパーツにそう告げて、稀阿は玄関扉を開け放った。

錆びて塗装の禿げた野晒しの通路へ、波打つトタン屋根から酷い雨音が響いていた。学園提携の寮の一つだが、安い寮費のせいか、高層ビルが立ち並ぶ中でカビと埃、ヒビに覆われた赤レンガ壁が見る物に軽い憐れみを与えてくる。しかも寮生は二階から三階のみ。一階は夜になるとバーになる。さらに学生寮として契約してるのは稀阿だけなのだ。

「あくまで提携してるだけ、か」

稀阿以外誰も契約していない寮。

少しでも裕福ならセキュリティのしっかりした学園近くの寮を借りたり、マンションを購入してるもの。

学園から離れた位置にあるこんな場所を借りる者は変わり者くらいだろう。　そんな通路を歩いて、鉄タラップの階段を忍び足で降りていく。

だが慎重に動いたつもりだが、一段、濡れた雨で階段を滑ってしまう。

甲高い音が響いてしまった。

それに稀阿の顔が顰められ……。

「よ、不登校チャンピオン。珍しくお外へお散歩かい？」

壁際から声を掛けられた。

自室のある二階から、階段を歩いていく。

今時珍しい軽量鉄骨のアパートに、塗炭屋根。階段も赤さびに包まれ、尚且つ塗炭屋根は階段用に、さらにもろく、あちらこちらから、土砂降りの天候のせいで、隙間から滝のように放射強酸性、さらに太陽風の作る毒が混ざった雨が滝のように隙間から流れてくる。

こういう時に際しての主人を守るバリア展開が行われるものなのだが、今の稀阿に彼女はいない。

三級市民動揺、大昔に使われていたというビニールを八角形の骨組みで張られ、雨を凌ぐ原始的な装着物――『傘』――を使用する。

しかし傘は稀阿がてにできるような物じゃない。

古いゆえに三級市民の間ででまわっているが、元一級市民の稀阿には警戒されて入手不可なのだ。

その途中、一階に差し掛かったところで呼び止められる。

壁を見れば、そこに『窓があり』ひょっこりと中年の化粧の強い女性が顔をのぞかせていた。

「……マダム・ファウスト。その呼び方は止めてください」

「お、そうか？」

「こんな時間に起きてるなんて珍しいですね。寮費ならだいぶ前に年額入れましたけど？」

稀阿が顔を顰めると、マダムはけらけらと甲高く笑い捨てた。

彼女は稀阿のいる学園寮でもある契約寄宿舎カテドラルの管理人兼一階のパブを経営するマダムでライラ・ファウスト。年の頃は三十台前半か後半か、少し年齢判別不可能な化粧だ。

人様から聞けば『マダム』と呼ぶには疑問符が浮かびそうな若い女性で、細胞操作で桃色にした地毛を梳きながら早朝になると時々階段脇の窓から顔を覗かせている。

「ははは、お前さんは金絡みなら優良児だよ。学園に行く行かないは別にしても金の心配はしてないよ。今日は例の委員長様の大騒ぎに起こされちまったんだよ」

強めに漂うアルコール臭。

しかも余り合法的でない煙草の臭いもふんだんに効かせている。

「今度でいいんだけど、ちと手伝ってほしい事があるんだけどよ」

「手伝い？　お店の営業時間は学生が部屋にいけない法律的な義務があって……」

「あ～いやいや、そっちじゃないんだ。実はよ。昨日の深夜に飲み代が溜まりに溜まった外交省の酩酊ちゃんがさ、酔っぱらった勢いじゃねぇのかな、なんか高価なパーツを飲み代のつけにつかってくれ……って、置いてったんだよ、そのみたことねぇパーツ、しかもどっちゃり。使える物と使えない物の分別手伝ってくれよ」

「ああ、まだ30前くらいの官僚のお偉いさんですか。例の飲み過ぎる人でしたよね」

「ああ、そいつに言ってやったんだよ。庶民から税金啜ってあくどく溜めこんでんだからいい加減金払え！　てな。つったら、『私官僚！　偉いのです！』なので下々に払う物はこれで十分だぁ――で、よこしたんだけど」

「ただの鉄屑の可能性があると」

そんな話をしていると、笑うマダムからピンク一色の、今時骨董になるだろう少し芯のよれた傘を押し付けられた。

「この傘やるよ。ディスア（稀阿のメイドロイドの名称）がいないんじゃこの放射能雨は身体に障るからな、古いけど充分だろ。お前一応元1っ級市民だから、連中も売ってくれんだろうしな。もらっとけ、ディスア直れば元の一級扱いも周囲からされっけど、そのボロボロの合羽だけじゃ心もとないだろ？」

マダムの言うように、一応稀阿も雨合羽を着ている。

それでも渡された物は、大昔に利用されていたスチール芯と、ビニールを張り巡らせた埃塗れの本物の傘。

正直三級市民ならともかく、一級市民は穢れた物と蔑む物だ。

だから、稀阿も興味はあって、しかも放射能の色濃く混じる雨の中では重宝する。

「助かります。遠慮なくお借りします。夕方お返しに――」

「やるよ。それともうすぐ誘導路の伸びる時間じゃないのか？　十字路とか気を付けろよ、一度激しく盛り上がるから巻き込まれたら洒落にならんぞ。監視カメラじゃ治安部隊がきても、もう、まにあわんだろうしな」

「はい、地上が盛り上がって、走ってきたら、その時は端っこで見学でもしてますよ」

マダムは何度か頷き、

「なぁ、チャンプ」

「なんです？」

「もしもよ……もし、お前の眼前にお前が望む道、それこそ誘導路みたいに道が開いたら、そこに門が現れたら――いや、お前には必ず現れるだろうな――だからよ、その時がきたらさ。あ～、頼るな。自分で開けろよな」

――意味わかんない。

何やら良い台詞を吐き捨てたらしいが。

彼女の意図するところが、まるで伝わらないのだ。

しかも、彼女は手を振ると、赤ら顔のまま身を横たえるように消えていった。

そのまま、窓枠も消失――

煉瓦造りの外壁に存在を戻らせるようにフォームチェンジしたのだ。

「飲み過ぎですよ、マダム。身体にきをつけてくださいね」

稀阿は一度壁に会釈をすると、借りた傘を差してタラップの鉄製階段から外に出た。

異様に体が重く、足並みが乱れてると感じたのは、長いこと外へでなかった弊害だろうか。

千鳥足にも似た状態で外へ出ると、雨風に霞むビルの向こうに学園校舎の屋根が見えた。

――生徒は今現在、皆あの場所にいる。

意思をトレースして、光のラインは校舎方向を示しているが、稀阿は舌打ち混じりに誘導路に転がった、鉱石の欠片――アルトアイゼンを靴先で弾いた。

弾かれた屑は雨の中でも音を立て跳ね続けると、道路中央の噴出した微量の輝度シートの粉に当たり、そのまま液状化を起こして雨と融合。やがて排水溝へと消えていく。

光の示す道から背を向けるように稀阿は歩き出す。

光の警告が、外出を控えましょう――と、三級市民用のメッセージが流れている。

――無理もない。俺、いまメイドロイドのディスアがいないからな。

一級市民としてはみてくれないよな。

だから稀阿はそれらを無視して、敢えて高校の校舎がある方向から逆走するように、遠くに霞んで見える巨大外壁目指して歩き出していくのだった。

カテドラル・ムラクモ――

人や宣教師たち、噂が飛び交う世界唯一と呼ばれる放射性強酸の雨が降り続き、天然の自然動植物が消えた世界。

人はそれを――終焉――

そう呼んだ。

もう世界は終わる。

既に歴史となった大昔の大戦争で、世界の大陸全てが吹き飛ばされ、焼き払われ、何もかもが光に包まれて、消えた。

けど、そんな過酷な状況の中で人は生きていたらしい。

それが自分らの祖先となった。

だから科学者たちは、こう叫ぶ。

この廃液の世界に秩序を、この世界に新たな文明を。

それが、小さな小さな大地の上に住むものたちの希望となった。

日々、異常発達する文明が生み出すビルが乱立する機械仕掛けの巨大都市。

だが、どんな花にも大地は必要だ。

厳密にいえば大地との一体だ。

けど、人は地下に根を張れない生命体だった。

地に足がつく――そんな言葉が昔あったというが、俺たちは大地を滅ぼし、その呪いを受けたのか、大地を歩くことは、このコロニーカテドラルでしか生存圏を赦されていない。

ゆえに大地は放射能を大量に含み、また建物の端々は、旧文明の遺産とまで言われる建造物でありながら、着実に蝕み建造物を少しづる汚染させる。

浸食と言えばいいのか――

雨の中を傘をさして歩く稀阿は、思いめぐらせる。

地中を掘ると、程なく異様に硬い金属が広がり、削岩を不可能にさせていた。ならばこの大地で食物は育たない。

極度に強い放射能はロイドがいれば、不可視のバリアとしても呼ばれるニュークリアーデリート機能で、放射濃度の風からも、無論天上に重くのしかかるように濃い灰色の天蓋からの強い雨も防いでくれる。

それプラス、自身の頭上にさらに可視可能な支柱のない傘が、展開、周囲へ流す。

さらに強酸性雨にも有効だ。

全て対放射能強酸への対策も著しく発展。

路面も、排水路も、溶かされたり汚染されたり等の被害がない、輝度（ルミナ）によって、放射能だろうが分解されて下水へと流れていく。

最もこの下水がどこに通じてるのか。

それを知る者は誰もいない。わからない。

何故なら、このコロニーは広い空間ではあるが小さな島のような存在だと社会科の授業で教わる。けぶる雨風に目を凝らせば、うっすらと、はるか遠くに強大な壁という建造物が、なんとなく見える。かなり離れていても強大と見得るのだから、近くにいけばかなりの物だろう。

高校1年の中盤に社会科見学で壁の内部へ見学会があるらしいが。それ以外で一般人は入れない場所だ。

普段も決して付近への立ち入りすら禁じられている。

外界遮断のルミナ鋼壁とよばれた壁は島全体を囲んでいるらしく。かなりの広範囲だ。そうでもしないと外界の風はヤバイという証拠なのだろう。

外界から吹くらしいさらに強力な放射能や強酸性風などから守る為にあるとかで、必然的に警備も改築も、盛んに粉われている。

それ以前に問題もあった。

オゾン層の破壊が産んだ弊害だ。

大昔の世界では、エコを心がけよう。などの言葉から、オゾン層を破壊するフロンガスは禁止されたらしい。が、問題はフロンガスではない。独裁政権で広く広範囲を自国と称して組み込む独裁者の国が、国の手の物を移住という手段で、戦争に成ったら内部から崩壊させるべく宙国人街などと称して、各国にはいりこんでいるらしい。

その大国はバブル景気と呼ばれる状態を保つため、バブル崩壊が来ると金融機関の株価などを、強制的に停止し、絶対に自国が儲かるように。他国でその国で各物資生産の際には、撤退するときは莫大な罰則金を払う義務を設け、それに対抗したさらに大きな国、世界の警察を名のる国は、その義務を拒否。さっさと撤退、こびへつらう弱小国の企業だけが馬鹿をみて、異常な税金を払わされたらしい。

ゆえに、その国も産業で発展したがために、異様な黒煙を無数の煙突から発し、さらには所

有する国内部の砂漠から飛ばされる黄砂によって、世界中に迷惑をかけ、ついには自然にまで迷惑をかけて、その黒煙でオゾン層を破壊。毒の太陽風はオゾン層で破壊されず、そのまま人体をも汚染したらしい。

もっとも世界の警察という別の大国も、も自国で生産ラインを確保。

ゆえに当時の黒煙や廃液などの垂れ流しをやめる議定書を設けたが、完全に無視、オゾンが消えるまで黒煙を浄化装置もつけないで吐き出させてたらしい。

そして別の島国では、噂では、このコロニーの大地、ここがその迷惑小国だったらしいが、原子力発電所なる、いまや骨董品すぎてどこも利用しない、過去の負債。それが４基同時に爆発。大津波はくるわで。大災害。

そして、放射能塗れの機材をこっそりと小国の各自治体へ運び山の中に廃棄。

さらに燃料棒を冷やす冷却水という放射能汚染塗れの液体も世界に発表した後、堂々と、今は消え去りし海へ流し続けたという。

海藻や珊瑚、魚介類は汚染され、地上でも広がったセシウムとかの関係で、植物は異常変化。動物は汚染され、それは人間にもおよび、そこで作ったコメを食べると、２万年は除去不可な放射成分が体内や大地に蓄積したという。

それら全てを無効化する機材、液体、そして輝度のような粉を使用し、完全分解、綺麗な水として、川に巡回させているという。

放射濃度の高さや、強酸の雨、分厚い雨雲を突き抜けてくる太陽風はオゾン層が本来は除去する毒素だが、それが完全に消えている今。

未だ酸素が地球に残ってることも不思議の一つだと科学者はいう。

そして太陽風を受けた人間、放射能、酸性雨を受けた人間は、基本三等市民、ロイドをもたない民だけが被害をこうむり短命で命を終えるという。

それでも、浅い部分にある大地の中、約１ｍ程の地下は壊せない岩盤に覆われていて。よく下水道が各地区に走れるように工事できたと、謎は皆の噂の的だった。

飲み場といわれるパブなどでは、公務員が推論を自負し皆がそれに聞き耳を立てていた。

それでも、全て噂の段階でしかなかった。

壊せない岩盤の中にある造られた地下空洞こと下水道。

その作成技術も技術者も、この地下下水がどこに通じているのかすら、いまでは全く知る者はいなくなった。

最後に残るのは上流社会、ｓ級一等市民、もしくは一等市民のみで、二等に関してはロイドを持つものや、持たない者に分かれて、一級と三級の板挟み状態だとか。

そして、それでも人々は長寿と平和を求めて、飛躍的に進化した文明や医学によって救われ、三等市民以外は、比較的静かに暮らしていた。

しかし、そこから異常は現れる。

機械文明の発達と共に、膨れ上がるように増殖していく機械仕掛けの道路――通称名、改革の路（みち）。

それは縦横無尽に張り巡らされ、都市は地震を起こして機械の路を増殖させる。

時には地中にあるという岩盤が動きまくり、プレートの変化。

そして、ビルでさえも朝に成ったら別の個所に移るような異常状況は続いていた。

既に地図は死んだ。

唯一判るのは街の中心部にある、通称ブラックタワー。玄関も窓も、避雷針すらない、異様な世界。

そこにある人工知能生命体のみが、最新地図を一日ごとに発行している。

ゆえに雨の中で映る空間ビジョンがそれを時折り発表した。

何故、路が地中から生み出されていくのか。

その機械路――誘導路はどこで製造されてどうして広がるのか。

少なくとも、雲まで届かんばかりの巨大外壁に周囲を包まれ、このカテドラル・ムラクモから出られない住人にとって、それは考えすら及ばない。そして何故そんな外壁があるのかも誰も知らない。

もう、すでに疑問視する声すら一般市民からは上がらない。

機械路は外壁に到達すると、その下へ潜り込み消えていく。異常に放射濃度の濃い雨が降り続く曇天の世界は、人の心すら冷たく染めるように冷気を揺蕩わせ、その影響で上空は高濃度により航空機体の通れない空域が雨雲より低い地区で航空路の最大限の上昇場所での飛行となっていた。

皆は思う。

雲海の上はどうなっているのだろうと。

晴れる事の無い雨雲の天空。

流れる雨露はやがて川となり、それも排水路に流され、どこかへ消えて行く。雨雲があるのだから、過去の記録データから、昔は海と言うおおきな水たまりによって、雲は発生地上に雨を降らせたとか。

だが、未だ海の存在すら確認されていない不可思議な大地を、人は生まれながら得ている記憶だけを頼りに生きていた。

与えられた大地の上で、己の存在の意味を知らず。

人々はただ、繁殖するだけを目的に暮らしている……。

それが、どういう意味で、この生活になっているのかも知らずに。

第一章・出会い

――強烈な光が輝いていた。